

オペラについての「三つの問い」のお話

2022/01/01



あけましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。ありがとうございました。今年もよろしく、お付き合いのほどお願いいたします。

暮れに、オペラサロンの方から楽しいメールをいただいたので「初笑い」にご紹介いたします。「ふくよかなご婦人が『私はミートテックで寒くない』と言うので笑ってよいのか困りました」。これには、思わず笑ってしまいました(失礼)。テレビ人気番組「笑点」の「大喜利」なら座布団1枚です。

さあ、その「大喜利」です。暮れに異変が起きました。レギュラー・メンバーの一人、林家三平師匠が突然降板を宣言したのです。成績が悪かったことを自覚して、「これから武者修行に出かけて、立派な身体になって戻ってきます」とお別れのあいさつをしました。周りの師匠連中は「頑張れよ」と冷ややかに応じていました。いま、若手のホープといえば、将棋の藤井聡太、野球の大谷翔平、ゴルフの松山秀樹と澁野日向子、テニスの大坂なおみ、スケートの羽生結弦です。彼ら若き天才たちには、そろって、優れた才能と恵まれた環境があります。三平師匠にはそれがなかったのでしょうか。特に、三平師匠には、名門の家庭環境と落語家一門という因襲環境が災いしました。三平さんの才能は、自らの才能を育て守ろうとする「支援者や落語仲間という環境」で鍛えられるはずでした。残念でした。

才能と天才

さて、その「才能と環境」です。藤井や大谷といった若手の天才たちが、なぜ天才かと言えば、答は決まっています — 「彼らには才能があるからだ」。でも、この「才能」と言う言葉は禁句です。話が、「才能のある、なし」で終わって仕舞うからです。さらに、「では、才能とはなにか？」と問うとき、こういった「言葉についての問い」に対して、いつも私が使う手法は、それを英語に置き換えて「具体的に分析」してみることです。「才能」と言う言葉について、英語の辞書は、沢山の言葉で分析的に説明してくれます。以下は、主に「ジーニアス英和辞典第5版」によります。

「才能」① 「実際に物事ができる能力」ability. ②「生まれつきの才能」talent.
③「天から贈られた個々の才能」gift. ④「生まれつきの創造的な才能」a genius. ⑤「学問・芸術習得の潜在的な才能」 aptitude.

このそれぞれについては、次のような区別があります。

[類語比較] [ability, capacity, talent, gift]

ability は「能力」を表す最も一般的な語で、主に人に対して用いる。人や動物の先天的、後天的な能力を指すが、後天的能力をいう場合が多い。この語は「いま…できる」という現在指向の名詞で、その点で **capacity** とは対照をなす。**capacity** は人だけでなく物に対しても用いるが、潜在能力を表し「これから…できる」という未来志向の名詞。

talent は芸術など特定の分野における先天的能力を指す。

gift は talent よりさらにすぐれた生まれつきの才能をいう：

He has the ability [capacity, talent, gift] to speak five languages.
彼は五つの言語を(いま)話せる / She has 「a talent, [a gift, an ability, a capacity] for music. 彼女には音楽の才能がある。giftの方が称賛の気持ち強い。

例文

- ①「歌手としての才能を伸ばす」
develop one's *ability* as a singer.
- ②「彼はすぐれた音楽の才能に恵まれている」
He *is very gifted* in music.
He *has a great talent* (*ability, aptitude*) for music.
- ③「彼女は幼くして絵の才能を示した」
She *showed a talent* (*genius*) for painting at an early age.
- ④「加藤先生のアドバイスが彼の隠れた才能を引き出した」
Ms. Kato's advice brought out his *hidden talent* (*ability*).
- ⑤「彼女には生まれつき音楽の才能がある」
She *has a natural talent* (*genius*) for music.
- ⑥「彼の才能は50代後半に開花した」
His *talent* flowered in his late 50's.
- ⑦「彼女には数学の才能がある」
She *has an aptitude* for (in) mathematics.
- ⑧「才能ある若手作家」

a gifted (talented) young writer.

日本語で「才能」というとき、英語が分析したすべてのことが一緒くたにされて。それを「才能」という言葉で現しているのです。ですから、藤井や大谷の才能は、「後天的能力と潜在的能力と先天的能力と生まれつきの能力を發揮出来る天才である」と言うことになります。全く、議論の余地はありません。才能とは生まれつきのものであって、周りのだれもがどうしようもないことなのです。これで、「才能」の問題はお仕舞い。

才能と環境

それでは、「才能」に恵まれない者はどうすればいいのでしょうか？ 「才能」にも、どこから、「破れ」はないのでしょうか？ 素粒子にも、対称性の破れがあります。天才にも、この「破れ」（**進入口**）があろうかと思われます。天才が天才である由縁は、彼や彼女が、自分の周りに「日々、自分を刺激してくれるグループ」を集めているからだと思います。それが、家庭環境であり、大学の研究室であり、個人の強力なアドヴァイサであろうと思われます。天才になり、天才をつづけていくのには、こういった刺激的な環境がなくてはならないものだと私は思います。藤井君の「感想戦仲間」といい、大谷君のチームメイトやコーチや監督やライバルやマスコミたちです。「天才とはなにか？」といえ、ば、「こういった環境を周りに集める能力」だといっているでしょう。

昨年末のNHKの講座では、リヒャルト・シュトラウスとホフマンスタールの楽劇《影のない女》を観ました。最後に、主人公の皇后が、黄金の生命の水を前にして、「私は飲みません」と宣言します。この水を飲むと、夫の皇帝の生命を救い、自分にも影ができて子供たちを産むことが出来るのです。しかし、皇后は、ここにきて、皇帝の生命と生まれてこようとする子供たちの生命をあきらめて、貧しくて喧嘩ばかりしている染め物師のバラク夫妻の生命を助けたのです。なぜ、皇后は、そんな割に合わない選択をしたのでしょうか？ その答えを台本作者のホフマンスタールは明らかにしていません。彼は、「はっきりさせて下さい」という作曲家のリヒャルト・シュトラウスの要望にも答えませんでした。

それで、解説者の私が代わりに答えなければなりません。「それは……」と行って教室内を見渡した私は慄然（りつぜん）としました。広い教室内が水を打ったように鎮まり、緊張感と期待をもった 30 名の方々の眼がすべて私に注がれていました。思わず身震いしました。英語でいう "Now, we are talking."（はい、そこです）です。ここにオペラを真剣に楽しむ仲間がたくさんいたと知ったときの感激と感動と責任感、は、講師冥利につきますものです。この多くのオペラ仲間の存在こそが優れたオペラ講座の「環境」です。いまの私は、幸せです。